

# 幼児の教育半世紀の辞

本誌主幹 倉橋惣三

日本の幼稚園協会が、その前名フレールベル会として、創設せられたのは明治二十九年（一八九六年）、『幼児の教育』が前名『婦人と子ども』として、創刊せられたのは一九〇〇年代の初頭、それを第一巻第一号として、爾来この第五十巻十二月号を以て、半世紀に充つる。

五十年は、一つの小さな月刊雑誌として、相当の続継といつてよからうが、その年月の内容を顧みれば、なんと大いなる半世紀であろう。その間の幾つかの主要事件を拾い挙げて見ただけでも、その世界的意義の重かつたことに今更に驚かされるのである。

一九〇二年

日英同盟

一九三三年

ナチス政権

一九〇四—五年

日露戦争

一九一〇年

日韓合併

一九一二年

中華民國

一九一四—一八年

第一次世界大戦

一九一九年

ベルサイユ条約

一九二〇年

国際連盟

一九二一年

ワシントン会議

一九二九年

世界経済恐慌

一九三一年

満洲事変

一九三二年

上海事変

一九三七年

日華事変

一九三九年

第二次世界大戦

一九四一年

太平洋戦争

一九四三年

イタリヤ降伏

一九四五年

ドイツ降伏

一九四五年

日本降伏

一九四六年

フィリッピン独立

一九四七年

印度独立

一九四八年

ビルマ独立

一九四九年

中華人民共和国

一九四九年

インドネシヤ連邦共和国独立

一九五〇年

中ソ友好同盟

一九五〇年

朝鮮事変

一九五一年

サンフランシスコ講和会議

われわれは、これらの内容をもつ半世紀の世界史的意義をこゝに詳かに語り得ないが、一九〇〇年以來、日本が遭遇し直直し経過した世界の変化は、実に容易ならぬものであつた。そうして、こゝで此の大きい視野から、わが国の幼児教育の進展に焦点をうつして見るとき、如何なる成育をして来

たのであろうか。又、この半世紀をつぶけて、日本の幼児教育を育てることを志とし、任務として自任して来た本誌——こういう言葉を使うのは聊か大言に過ぎるが——今半世紀記念の年を了るに當つて、その点に大言たることを恥じずにいられない。

顧みて我國の幼稚園の創めは、明治九年（一八七六年）であるから、本誌の創刊は、それにおくれること四半世紀である。この間こそは、日本の幼児教育の初期という訳であるが、一九〇〇年（明治三十三年）には、幼稚園の教官公立一七九、私立六一 合計二四〇を数えている。数としては未だ少なかつたが、その熱意は大に盛んなものであつた。それから、公立も次第に多くなつたが、増加の比は、明治四十二年頃の私立の増加によつて、総数が大に加わり来り、現在の国公立八一、私立九七六、合計一、七八七になつて居る。（昭和二四年四月現在）

これに保育所の、公立五七六、私立一、七七八、合計二、三三三（昭和二四年一月現在）併せ数えれば、保育施設総数は四、一四〇となる。そして、その教職員数は一五、五七九を数えるが、試みに本誌の月々の発行部数を此の数字に割

当てれば、教職員諸氏一人一冊は未だしと雖も、施設数では大体一施設一部は充分余裕ある数字である。尤も、これはたゞ数字上の計算であつて、實際は如何なる割合になつてゐるか、またその実数にしても如何なる意味に解釈すべきものかは明かでない。たゞ、本誌が保育者諸氏の大多数の愛読を得ていることだけは、自ら考えて喜びと感謝とを表することを許されるであらうか。われらの微力を省みながらも、激励を感ぜずにいられないのである。

筆の序に、私自身と本誌との結びつきをすこし回顧する。私が『婦人と子ども』時代からの本誌との縁は、明治四十三年頃からのことで、それから、いつの間にか四十年になつてゐる。半世紀の五分の四と思えば、随分長いことである。一年十二冊として四百八十冊に何かしら書いて来たことになる。書くというは本誌のためのようであるが、実は、本誌を草紙として、保育について勉強させて貰つた訳である。勉強といへば聞こえもいゝが、その間、読者諸氏の目を煩わし、お邪魔をしつゞけたことは恐縮にたえない。よくもまあ、ずうずうしくと思うと、われながら呆れるが、よくもまあ引つゞいて、或は時々でも、読んで下さつたことを思うと読者に

感謝にたえない。よくもまあ、たねがあるものだとも思うが、たねの価値如何は別として、筆者としては、その月々、年々、にいつも新しい感興と切実さなしに筆をとつたことは一度もないと、自分に向つていゝ得る。従つて読者には価値はあつてもなくても、筆者自身の保育の心は此の雑誌で養いつゞけられたのであつた。自分勝手な言い草だと笑わないで下さい。たゞ密に恐れることは、如何に好意ある誌友にも退屈されることがありはしないかということ、殊に頭が古くなり、ひからびていはいはしないかということであるが、もう暫くは編輯をつゞけさせて貰いたいと希つてゐる。保育について語るには筆者の呼吸だから。但しそれも、まさか、もう半世紀とは望んでいないが。

それにしても、本誌に存在の価値をつゞけさせたのは、誌友諸君、全保育界諸君の貴重なる毎年の寄稿である。本誌の半世紀を飾るものありとすれば、偏々にそれら多くのページである。これは筆の序でゝはなく、真に心からの、半世紀の感謝である。後更に半世紀、来世紀の御支援を希えて已まない。これを以て、長しともし、短しともしすべき、わが『幼児の教育』半世紀の辞とする。